

## 跡見花蹊と跡見玉枝

### 要旨

跡見玉枝は本学の学祖跡見花蹊の従妹にあたり、明治・大正・昭和初期にかけて活躍した桜の画家である。その生涯は、玉枝自身の晩年の回想と学園の一次資料である『跡見花蹊日記』からたどりみることができる。玉枝は少女時代に花蹊の許に身を寄せた一時期があり、花蹊の身近に暮らした縁で姉小路家に入入りするようになる。それは、姉小路良子を中心とした公家文化に親しくふれ得た日々であった。また、日記や残された書簡から、桜の師宮崎玉緒と花蹊に交流があることが知られ、さらには玉緒の仕えた主君と花蹊の間にも親交が認められる。若き日の玉枝は、花蹊の豊かな人脈に支えられてあることがうかがえるのである。

植田 恭代

## はじめに

跡見玉枝は跡見花蹊の従妹で、桜の絵を得意とした画家である。その生涯を伝える『桜の我が世』<sup>1)</sup>は、玉枝の口述にもとづいて、主宰した私塾精華会の会員井上波子が著したものである。本学では、平成十六年(二〇〇四)に花蹊記念資料館第三回企画展として「桜の画家 跡見玉枝展」が開催され、本著を資料として玉枝の上京まで、米国滞在、還暦祝賀会に分けて紹介されている。<sup>2)</sup>幕末に生まれ明治・大正・昭和初期にわたり桜の画家として活躍した玉枝は、父の理解のもと複数の師と出会いに恵まれるのだが、若い時期に従姉跡見花蹊のもとに身を寄せており、上京の後も花蹊ならびに花蹊周辺の人々と関わりが深い。玉枝の事跡を明らかにすることは、一人の画家の生涯をこえて、跡見花蹊の周辺事情を別の角度から照らし出すことでもある。

本稿では、企画展の成果を受け跡見の歴史を検証する観点から、玉枝の回想と花蹊の日記にもとづき、若い時期を中心に二人の関係を一度たどり、桜の師である宮崎玉緒との関わりまで含めて考察することを目的とするものである。

### 一、花蹊のもとへ

跡見玉枝は本名勝子、安政五年(一八五八)四月二十八日、勝造の三女として生まれ、<sup>3)</sup>昭和十八年(一九四三)八月七日に数え歳八十六歳に

て没した。父勝造は跡見花蹊の父重敬の弟。花蹊は天保十一年(一八四〇)四月九日生まれであるから、玉枝はちょうど十八年若い従妹になる。二人が親交を結ぶようになるのは、父勝造の事情によっている。前述の『桜の我が世』は玉枝七十三歳初夏の口述をもとに翌年春に発行された装幀の美しい本で、桜花研究に造詣が深い『桜』の著者である帝国学士院会員三好学<sup>4)</sup>の序文を戴き、玉枝とゆかりの人々の作品を豊富に掲載する。その回想部分の最初「祖先と生立ち」からみていこう。

私の父は跡見主水(勝造)と謂ひ、天保十一年江戸へ出て水野越前守にとりたてられ、江戸は牛込の市ヶ谷加賀町で田宮流の武術指南を致して居りました。私は此家にて(安政五年四月二十八日)勝造の三女として生まれました。あの安政二年の大地震では見知らぬ二人の兄弟が失はれて居りますため、両親は兼々江戸を去りたい希望を持つて居りましたので、万延元年遂に一家をまとめて京都へ移り住む事になりました。そして公卿穂波伯爵家に用ひられ、側道場を開いて武術指南を致して居りました。

玉枝は牛込市ヶ谷加賀町の家で生まれ、安政二年(一八五五)十月二日の大地震で兄弟を失った両親が江戸を離れることを望み、万延元年(一八六〇)に京都へ移り住む。父勝造が仕えた公卿穂波伯爵家は、藤原北家の流れを汲む高藤男定方が創建した勧修寺に始まる勧修寺流のひとつで、江戸時代の勧修寺常尚を祖とする家である。勧修寺顕章男の経度は

穂波経治を養父として穂波家に入り、戊辰戦争に功績のあった人である。経度は天保八年（一八三七）十一月十一日生まれ、勝造が穂波家に用いられた正確な日時は不明ながら、万延元年に経度は二十四歳、維新に向けて勢いづく時期に、勝造は穂波家の庇護のもと側道場を開いて武術指南をしたと思われる。京都に移り住んだ玉枝が花蹊の許に身を寄せたのも、戊辰戦争という世情が絡んでいる。

其の後世の中は段々騒がしく成り、伏見の戦争が始る上野に戦争が始るといふ次第、父も穂波様に従つて江戸へ下りました。やがてそれも平定したと聞きますが、穂波様や父は帰つて参りません、……中略……兎角するうち同僚（父の）若薫が、父の武器一切を伯父の許へ届けて呉れましたので、心にかゝる父の消息を訊ねましたけれど、その下僕は同僚の亡くなられたことを告げるのみで、父の安否は更に分らず、その時の便りなさは未だに忘れられません。……中略……その頃、ちやうど、従姉の跡見花蹊女史が東の洞院に塾を開いて居りましたので、こゝで世話に成る事に成つたのでございます。

穂波経度に従い上野の戦争に赴いた父勝造が消息不明になり、伯父のもとへ武具のみが送られている。勝造の兄としては三宅氏に入った勘左衛門と花蹊の父重敬がいるが、伯父の、父は亡き者と思つて身を立てることを考えよという進言により、玉枝は京都にいた花蹊の塾に入った。

『桜の我が世』の回想は、次のように続く。

塾入をして年も改まり、明治二年でございます。亡くなつたと計り思つた父が、はからず生きて還つて参りました。その時のうれしさなつかしさ、まるで夢のやうで、今猶この当時の光景さまがありくと思ひ出されます。かうしてまた父の許へ戻つて参りました。

明治二年、父勝造が生還し、玉枝は父の許へ戻る。この回想によれば、玉枝が花蹊の許で暮らしたのは、上野の戦争の始まる頃から明治二年までになる。

玉枝が花蹊の許に寄寓した時期の『桜の我が世』の記述はこれですべてであるが、このあとに出された玉枝の回想録がもう一冊ある。昭和十六年四月に精華会から発行された『さくらの木蔭』である。<sup>6)</sup>これは、昭和九年四月に精華会門人たちによつて（日本）工業倶楽部で催された喜寿の賀宴から七年を経過し八十三歳を迎えた玉枝が、記憶をたどり過去七年間の思い出を記したもので、扉に二代目校長跡見李子の「さくらの木蔭」、続いて大宮知栄上人・徳富蘇峰の題字を戴き、「跡見玉枝述」とある回想と玉枝の作品や玉枝ならびにゆかりの人々の写真、精華会門人たちの文章などを収める。『桜の我が世』の半分ほどの厚さで補遺的な一冊であるが、昭和九年四月十七日から一週間白木屋階上で喜寿記念桜花展覧会が精華会主催で開催、二十三日に日比谷公園松本楼で喜寿祝賀会が催されたことをはじめ、玉枝晩年の回想がしたためられる。そこに、幼少期の回想が差し挟まれている。

慶応三年春の頃、私が十歳の時に父は上野の戦争に参り、其留守の間、母は幼き三人の子供と乳児をか、へて困つて居りました、そこへ父の兄三宅勘左衛門と申す伯父が来りまして、こんなに困つてゐるなら一先づ子供達を処分してはどうかと申しましたので、兄の富蔵は伯父の許へ、私は京都に居ります従姉の跡見花蹊の所へ預けられ、母は東江州に残り、姉のけい子と七つの妹良子と、その頃まだ乳児の末の妹静子、及東京より来て居りました書生等と共に暮すことになりました

花蹊の許へと進言した伯父は父勝造の兄三宅勘左衛門である。そこに兄が、花蹊の許に玉枝が預けられ、母は東江州すなわち近江の湖東といわれる地域に姉けい子、妹良子、静子、書生たちと残っている。十一歳の玉枝は学ぶに適した年齢であり、花蹊のもとに預けるのならば姉より、日記では慶応四年の記述から確認できる。慶応二年末、花蹊は京都西洞院の家に移り住み、翌慶応三年には勝造が花蹊の許を訪れ、扇面の揮毫を依頼したり法事に来たりしており、前述の穂波経度に従つての江戸下向は慶応四年の記述に確認できる。

慶応四年

(二月) 十四日 辰 雨

此日、父さま来られ候。七ツ時、勝蔵子来。穂波殿此度関東征伐ニ付御旗奉行ニ成らせられ候ニ付、十五日御出立、御供の義<sup>(儀)</sup>ニ付、民部来。又、中務奥田来。勝蔵子ハ早々帰り、跡みなく、私も同道ニテ帰殿いたし候。中務奥田、途中より穂波殿へ行候。私、御殿ニテ一宿。

(二月) 十五日 巳 晴。寒。

朝、中務奥田、此度穂波殿へ御殿より御借<sup>(貸)</sup>ニ相成、朝御四畳半ニテ離別の御杯下され候。殿様、ひとく別を御惜み遊し、一統流涙いたし候。先々無事出立いたし候。

(二月) 三十日 申 晴。寒風。

昨日、江州八幡文来。かつ女世話の義<sup>(儀)</sup>申来り候。

(三月) 十三日 酉 晴、亦雨。

此日、江州かつ女、勘と同道ニテ来り候。

花蹊の日記によれば、慶応四年二月十五日に勝造は出立している。同じ月の三十日に「かつ女」と記される人こそ、玉枝である。『さくらの木蔭』に「慶応三年春」とあったのは、晩年の玉枝の記憶違いではないかと思われる。戊辰戦争の時期からも四年と考えるのが妥当であろう。三十日に玉枝ニ勝子の世話を頼む書状が花蹊の許へ届き、翌月十三日に伯

父勤左衛門に連れられて玉枝は京都の花蹊の許へ来ている。「江州八幡」「江州かつ女」とあることから、この時、玉枝一家は近江八幡（現滋賀県東近江市）に居住していたらしい。ちなみに『跡見花蹊日記』には慶応三年九月・十月・十二月に「江州主水」という記述があり、これも勝造もしくはその周辺の人々を表す可能性を孕む<sup>8)</sup>。

慶応四年、九月八日に明治と改元される年の三月十三日、数え歳十一歳の玉枝は二十九歳の花蹊の許で暮らすことになった。玉枝が父の許へ戻った時の記述は『跡見花蹊日記』から確認できない<sup>9)</sup>。明治二年の日記は一月十日～十二日、一月十三日～三月三日、三月五日～十日の記述がなく、三月十一日・十三日を記したあと、四月六日から七月廿四日までの断片的な記述が項目にまとめられているため、生還は日記の残されていない時期であった可能性が高い。明治二年の寡少な記述に玉枝を表す「かつ女」等は見えず、記述の空白期間のどこかで、父勝造が生還しふたたび父の許で暮らすようになったのではないかと推察される。

## 二、姉小路良子との交流

花蹊の許での生活は一年たらずであったと推測されるが、その日々は玉枝にとって忘れがたいものであったようである。前掲『さくらの木蔭』の続く回想をあげてみる。

私が預けられました頃の花蹊の宅もゆたかではなく、伯父（花蹊の

父）は姉小路様の家令をつとめ、まだ若い花蹊は昼間は姉小路様へお稽古に上り夜は自身の勉強に追はれて暇もなく、家庭は伯母（花蹊の母）が上手に切りもりを致して居られました、……中略……「おかつさん（私の本名）今日はもうお米が無くなりましたよつて一升程姉小路様へ行って貰うて来て下さい」とよくお使いに走つたもので御座いました、

当時、花蹊の家もおよそ豊かではなく、花蹊の母幾野が切り盛りしていたらしい。花蹊の父は姉小路家に仕え<sup>10)</sup>、その縁で花蹊も姉小路に教えに上がり、夜は自身の勉強に励んでいたが、日々のお米まで姉小路にもらう生活であった。花蹊の許に身を寄せた玉枝は、日常の使いも含め姉小路家に頻繁に出入りしていたようである。

私が始めて姉小路様へ上りましたのは、桜の花が京の町を美しく色取る四月半の頃で、伯父は嵯峨の奥の虚空蔵さんへ、良姫様を御連れ申し十三参りに御出掛けのお留守で御座いました、御家に御出に成つた若殿様が「花蹊のよい豆腐買ひが出来たなあ」と仰有る御声が聞えて来ました事を、今でもよく覚えて居ります、其の若殿様は私より一つ年下の九歳で、公義様と仰しやいました、或時姉小路様で御客様を遊はすので、跡見の庭の萩の花を届けて呉れとの事で、私とその御使に参る事になり、沢山の美しい萩の折枝を肩にして出かけました、

花蹊の日記によれば玉枝が花蹊の許に来たのは三月十三日であるから、ほぼ一ヶ月後に初めて姉小路家に上がったことになる。若殿様はちに伯爵となる公義。公義は九歳とあり一つ年上の玉枝は十歳になるが、これは満年齢で記したのではなく、前に慶応三年春という記述があることから、公義の年齢とともに一年の誤りが生じていると考えるのが妥当であろう。「花蹊のよい豆腐買ひ」ということばに、花蹊の身近な年若い従妹玉枝の様子がうかがえる。花蹊側の用でお米を分けてもらいに行つた玉枝は、また、姉小路家側の所望に応じて跡見の庭の萩を届けにも行く。玉枝は日常の所用を努めながら姉小路家に入ります。年齢も近い公義は身分は違えども親近感を覚える若殿であつたろう。さらに注目されるのは、玉枝と姉小路良子との交流である。続く部分をみてみよう。

私は其頃から花蹊を師として、四條派の絵と、お習字を、教へて貰ひました、又、漢学は姉小路良姫様に教へて戴く為に毎朝本を携へて同家へ通つたもので御座います、良姫様にお習ひする頃一番嬉しく存じましたのは、よく出来た時に御褒美にお菓子や玩具をいたゞく事で、或時、いつもより上手にお答えが出来たとお褒めのお言葉と共に、桃色の着物をきた可愛らしいお人形を下さいました、かねがねそのお人形に目をつけて居りました私は、たとへやうもない程嬉しくて其人形を抱えて帰りました、後年私はその人形を大切な物の一つとして保存いたして居りましたが、あの大震災で焼失いたしました事は誠に残念に存じて居ります、

玉枝は四條派の絵画と習字を花蹊に習い、漢学は姉小路良子に学び、毎朝良子のもとに通つたという。晩年の回想に特筆されるのは、ご褒美の御菓子や玩具である。良子からの褒美は公家にふさわしい品々であったに違いない。桃色の着物を着た憧れの人形を胸に抱き、喜びに心躍らせてうきうきとした足取りで帰る少女玉枝の姿が彷彿としてくる。この人形は生涯の宝となり、震災で失われても玉枝の心には大切な人形として刻まれている。玉枝が漢学を学んだ日々は、良子との交流から公家文化に親しみ得た時間であつた。

若い頃から諸学問を修めた花蹊の教養は、相当なものである。花蹊は十二歳で石垣東山の門に入り書を、榎野礎山について絵画を学び、十七歳で京都へ遊学し、宮原節庵に漢学・詩文・書法、絵画を丸山応立、中島来章に学んで二年程の後大坂中之島に移り、後藤松陰に漢学、詩文を学んで<sup>1)</sup>いる。花蹊の教養を玉枝も身近に学び、良子との出会いによって漢学のみならず生きた公家文化を吸収している。姉小路良子は姉小路公知の妹で安政三年(一八五六)四月四日生まれ、若き日に国文を渡邊重石丸に、漢文を蒲生重章、和歌を伊達千広、書画を花蹊に学び、明治十年十月に宮内省皇后職に入り、十二年二月権掌侍、二十一年十一月掌侍、三十五年一月権典侍、大正三年八月従三位、典侍に準じて取り扱う旨の沙汰があり、同四年勲四等に叙せられ宝冠賞、昭憲皇太后に重んじられ、才気煥発な女性であつたことが伝えられる。<sup>12)</sup>慶応四年当時、花蹊二十九歳、良子は十三歳で玉枝の二つ上、花蹊が良子の教授に参殿する縁で、

玉枝も良子に出会う。歳の近い良子は親しみやすい師であつたらう。『跡見花蹊日記』には、玉枝が花蹊の許へやってきた当初の記述があり、花蹊が玉枝を連れて姉小路家に入入りする様子も確認できる。

慶応四年

(三月) 十四日 戌 晴。

朝、式部女参殿いたし画頼みに参り候。夫ヨリ私帰宅致し候、かつ女連て也。

(四月) 二日 辰 夕方一寸雨。

朝、勝女連て帰り候。

(四月) 四日 午 雨。

昼後ヨリ勝女、岩尾、私、三人連ニテ参殿いたし候。此日、殿様、良姫様お延生<sup>(遷)</sup>日ニテ御祝也。勝女、岩尾、七ツ時帰り候。私一宿する。

(四月) 十一日 丑 雨。

此日、御殿ヨリ呼来候て七ツ時より参殿いたし候。典膳子、兵部子来候て同道也。夕、母さま、勝女連て参られ候。皆一宿。

(四月) 十六日 午 晴。

八ツ時より勝女、竹の女共に岡崎<sup>(ママ)</sup>へ、伏田へ行。

(四月) 廿四日 寅 晴。

昼後、参殿いたし候。かつ女、着物なく、こしら<sup>(拵)</sup>へに参り候。漸大坂屋、夕方持参いたし候。私一宿する。

(四月) 廿五日 卯 晴。

昼時ヨリかつ女連て式部方へ行、暫して日根野へ行、いろく咄し、七ツ時迄遊ぶ。

(四月) 廿六日 辰 夕方ヨリ雨、大雨。

夕方、民部、主税子、かつ女迎ひに行候。皆一宿。

(四月) 廿七日 巳 晴。

朝、かつ女連て帰宅。

(五月) 廿一日 丁酉 晴。

此日、かつ女病氣にて呼に來。夕方、二条へ行、一宿する。

(五月) 廿二日 戊戌 晴。

亦、かつ女あしく候て呼に來。夜、二条へ行、一宿する。

四月の記述には頻繁に「かつ女」||玉枝がみられる。四日の良子の誕生日には祝いの席に一緒に上がっている。京都に來たばかりの玉枝に公

家の娘の誕生祝いは、どう映ったであろうか。五月に玉枝が病気になった時は、花蹊は連日戻っている。

また、姉小路家への行き帰りも公家の文化にふれる機会であった。『さくらの木蔭』は、道すがら出会う公家たちにも言及する。

さうした姉小路様への行き帰りに、今で申しませば、学習院の様な所へお通ひになる、公達方によくお逢ひいたしました、お部屋住の方々はそれへお供をお連れに成り、稚児まげで美しく薄化粧遊ばした額に、白粉で、公孫樹の葉を描き紫と白との矢飛白のお振袖に、紫と白のぼかしのお袴を召してお出になり、又、御当主のお方は、歯を黒くお染めになり天上眉をつけ、仮の直垂、烏帽子のお姿で御座いました、そして三人程のお供を従へられて、チリンチリンと響きの良い金棒を引いたお先払ひが「下におらう 下におらう」と呼ばはりながら先に立ちました、かやうな折りには通行の人々は必ず、土下座をしてお通りを待たねばなりません。田舎から出て来た幼い私の眼には、かうした公達方のお姿が、それはそれは美しく気高く見えたもので御座いました、

稚児髻を結び額に白粉で公孫樹いしちょうの葉を描いて紫と白の振り袖に袴の女性、お歯黒をし天上眉に烏帽子姿の男性、三人のお供、チリンチリンと良い響きの先払い。目慣れぬ公達に玉枝は気高さを感じる。良子の許への道中も、公家の文化にふれる場であった。しかし、玉枝の生活は相変

わらず質素であったことが、『さくらの木蔭』には記される。

花蹊師の許には私の外に、封州の御家来のお子で私達が何時も常さん常さんと呼ぶ、常蔵さんと言ふ十五になる美しい男の子が習字の稽古に来て居りました、又宮原竹野さんと言ふ書家のお嬢さん、角野さんと仰有るお医者娘さん達が習字と絵のお稽古に来て居られました、此の三人は何の苦勞も知らぬ福な家の子供さんでしたが、私は厳格な伯母の許でいろいろの用をいたしながら勉強せねばなりませんでした、それ故お清書を書く紙も「御祝儀」とか「金何百疋」とか書いてある紙ばかりで清書をして引立ちません、……中略……小さい私はいつも真白な紙を使ふ竹野さんや角野さんがどんなに羨ましかつたか知れませんでした、……中略……此様に御一緒に居た人達は皆、花蹊先生の許を離れてそれへくの運命と闘てゐられます間も私は相かはらず、お粥をす、りながら「金何百疋也」の紙に絵をかき字を習ひいたして居りました、師匠花蹊は「此子は我慢強いところがあるから後で必ず倅をするであらふ」と申されました、幼かりし日羨ましく思つた人達は、皆世の中の冷たい風に脆くも倒され、不幸な私は、何度も、何度も倒れか、りながら、只今となりましては、只一人かく安楽に過して居りますのも、師匠を始めお世話くださいました方々の賜ものと感謝致して居る次第で御座います、



花蹊の母幾野は、預けられる身の玉枝を学ぶために来ている裕福な家の子女たちと同等には扱わず、玉枝には裏紙を使って清書させたという。中略部分には、その裕福な家の人々がその後波乱の人生をたどったことが書かれ、玉枝は安泰な晩年を花蹊はじめ世話になった人々のおかげと感謝している。そして、少女期の回想はこう結ばれる。

只今でも眼をつぶりますと、つや、かな稚児まげ、美しい振袖姿、チリンチリンとなるお先払ひ、机を並べた人達の面影が髣髴として、險の裡に浮んで参ります、なつかしき思ひで、夫れも最う七十年の昔となりました。

姉小路家への行き帰りに見た光景と聞いた音は、七十年の星霜を経てなお玉枝の心に生き続ける。『さくらの木蔭』には「幼い私」と表されるが、わずか一年ほどの間ながら花蹊の許に身を寄せた日々は、少女時代の玉枝が良子を中心とした公家文化圏に親しんだ歳月であり、花蹊の縁ゆえに玉枝の素地となる教養を育んだ日々と考えられる。

### 三、桜の師 宮崎玉緒

次に、父の生還によって花蹊の許を離れたあとの玉枝をみておきたい。『桜の我が世』は父の配慮によって恵まれた教育を受け、桜の師宮崎玉緒とも出会ったことを伝える。

父は私をよく理解して、私の個性を伸ばすために意を用ひて呉れました。絵の手ほどきを花蹊女史に、(のちに長谷川玉峯先生に師事す)漢学習字を宮原易安先生に、和歌を宮崎玉緒先生に就て学びました。此の宮崎先生は、医を業とされ、その上著名な国学者で、且つ日本画をもよく描かれ、殊に桜花の知識におきましては、他にないらびもない含蓄の深い先生で御座いました。私は、此の師の膝下で桜の研究をこゝろざしました。

父勝造の生還は、前節でみたとおり明治二年春と思われる。姉小路家にもなつて明治三年八月に上京した父や弟に続き花蹊は同年十一月に江戸へ移り住んでおり、それまでの一年余りを玉枝が引き続き花蹊に師事した可能性は残される。ただし、花蹊の日記からその詳細を確認することはできない。玉枝は、丸山四條派の絵画を学んだ花蹊に学び、のちやはり四條派の長谷川玉峯に学び、基本的には写実的な花鳥画の系統にあるといえよう。しかし、桜の師となったのは、和歌を学んだ宮崎玉緒である。しばらく、この宮崎玉緒についてみてみたい。『大日本人名辞書』は次のように記す。<sup>13)</sup>

桜戸と称し近江の人 榊光慶の男 世々医を業とす 少壮宮崎氏を  
つぎ大和介と称し 仁和寺王府に仕ふ 小松宮に従ひ屢戦地に臨む  
学を好み皇朝の典故に精しく又和歌を善くす 著す所言葉の墨繩、

日本文典礎、日本語学、言霊本義等あり 又画を好み各種の桜花を集め自ら之を描くに工なり 明治二十九年九月十七日没す 年六十 九 洛東神楽岡に葬る

「玉緒」は滋賀県蒲生郡の村名で、昭和二十九年に神崎郡八日市町と合併して八日市市となり、現在は東近江市となっている地で玉緒神社がある。<sup>14</sup> 玉枝が宮崎玉緒に師事した経緯は不明だが、母が姉や妹たちと残る近江八幡に父勝造が帰ったのであれば、同じ湖東出身という地の縁も考えられる。

桜の画家としての玉緒の名は、『桜の我が世』三好学「序」のなかで言及されている。

桜品の描写は三熊花顔を祖とす、妹の露香亦兄の筆意を受け桜画に巧なり、露香は其描法を織田瑟々に伝へ瑟々は之を宮崎玉緒翁に伝ふ、翁は桜戸と号し国文に通じ和歌を能くす、明治年間多く桜品を描写して世に弘め、又京都平野神社に数多の名桜を移し植えて其保存を図れり。

桜の描画は三熊花顔を祖とし、妹露香を経て織田瑟々から宮崎玉緒へと伝えられたという。花顔は江戸時代中期の京都の画家三熊思考（一七三〇～一七九四）の号。思考は桜を描き『桜花三十六帖』という画帖にまとめたことが知られ、一方、伴高溪『近世畸人伝』の挿絵を描き草案

し、『続近世畸人伝』の草稿を著した人でもある。<sup>15</sup> 花顔、その妹の露香、広瀬花隠の桜画については、三好学『桜』にとりあげられており、山田孝雄『桜史』でも三熊思考で節を立てる。<sup>17</sup> 思考からその妹露香、広瀬花隠、露香の弟子の織田瑟々と続く系譜は桜だけを主題に描く「桜画」の絵師たちであり、近年ではこれらの絵師を「三熊派」と名づけ、美術史に位置づけることが試みられている。<sup>18</sup> 織田瑟々は露香の弟子の女流画家であり、近江国神崎郡御園村河合寺（のちの滋賀県八日市市、現東近江市）の生まれ、湖東の出身で本名は政江、父は織田信長九男信貞を祖とする津田三位貞秀。<sup>19</sup> 広瀬花隠とともに三熊派を継承する。しかし、思考の博物画的視線と和歌的伝統を引き継ぎ内裏「左近の桜」を描く榮譽にも浴した花隠に対し、夫の没後仏門に入ったとみられる瑟々は中央画壇とは無縁に桜を描き、作品の実態も発掘調査の途上であるという。<sup>20</sup> 画中に年記を入れることの多い瑟々の桜画は、近年光が当てられてきたところで、四十二歳の時の「南天桜図」が近世の女性画家の作品として紹介され、<sup>21</sup> 詳細な検討により三熊派の流れを受け継ぐ写実的描写からやがて花形や葉先に独自の描法が現れることが指摘される。<sup>22</sup>

これら三熊派のなかに玉緒が入れられていないのは、瑟々が名声を得ずその後半生も明確ではないことに加え、玉緒が専業の画家ではなかったことも一因であろう。しかし、この瑟々の桜画が玉緒に伝えられた。二人の出身地は近く、瑟々の故郷神崎郡御園村は神崎郡八日市町となり、玉緒の出身地玉緒村をはじめ蒲生郡の四ヶ村と合併して昭和二十九年に八日市市（現東近江市）となる地域である。<sup>23</sup> 玉枝は玉緒に師事して和歌

を学び、桜を描く。三熊派と呼ばれる人々は個人差はあれ基本的には写実的な描法であり、もともと四條派の絵を学んだ玉枝が博物学的な桜の絵を描くのは自然でもある。玉枝の絵画については改めて美術史の観点から具体的な作品にもとづいて別途検討する必要があるが、『桜の我が世』掲載の作品を眺めてみても、精緻な描法で桜のみを描く絵画は多い。玉緒は山田孝雄『桜史』にも「桜戸玉緒」で立項されている。<sup>24)</sup>

桜戸玉緒は本姓宮崎といひ、通称は大炊といひき、近江八幡の医榊光慶の長男として文政十一年に生る。慶応三年仁和寺宮の侍医宮崎家を継ぎて宮に仕ふ。その本職は医なりしかど、国学に通じ又画をよくし武芸に達せり。はじめ仁和寺宮に仕へたる時、和歌を以て奉仕し、傍ら桜を植えて宮を慰め奉り、またこれを描きて宮に奉れり。明治五年京都平野神社の神官となりて、その神社の境内に桜を多く植ゑたるが、後に平野神社が桜の名所の一となりし源まさにここに在り、居常桜を愛してその保護と顕彰とに熱中したる事蹟少からず。明治二十九年九月京都に没す。時に寿六十九。玉緒の桜に関する事蹟は平野神社に桜樹を植ゑしことと、桜の写生家として世に桜の重んずべきを知らしめしことを以て最とす。

玉緒の本業は医者で国学・絵画・武芸に通じ、前掲引用部分にある著作のほか『詞の八衢あはせかのみ動詞之正格』（明治二十七年）「宮比之大臣略御神徳記」（明治二十五年）等もあるが、名を後世に残す国学者と

いうより、事跡の一環として国学がある。玉枝が玉緒に師事した正確な年月日は確認できないが、父の生還により花蹊の許を離れた時期とすれば四十代後半頃と推定される。玉緒は仁和寺宮を慰めるために桜を植え、絵に描いて献上し、のちに京都平野神社の神官となつて境内に多くの桜を植ゑる。玉緒の桜は仁和寺の宮と縁が深い。前掲の玉緒の経歴には、「仁和寺王府に仕ふ」「はじめ仁和寺宮に仕へたる時、和歌を以て奉仕し、傍ら桜を植えて宮を慰め奉り、またこれを描きて宮に奉れり。」とあった。この「仁和寺宮」は小松宮彰仁親王で、弘化三年（一八四六）一月十六日生まれ、伏見宮邦家親王の第八子、安政五年（一八五八）仁和寺に入り法名純仁、王政復古にともない還俗して嘉彰に名を戻し、明治十五年（一八八二）東伏見宮から小松宮に改称し彰仁とした皇族軍人であり、イギリス留学の経験からイギリス王室との親交を深めた人であるという。<sup>25)</sup>前掲の記述によれば玉緒は小松宮に従つて戊辰戦争に従軍し、玉枝は帰還した玉緒に師事したと考えられる。玉緒の桜はこの主君のために始まり、平野神社にも植ゑられる。『桜史』「桜戸玉緒」は、「明治維新後わが桜は古来未曾有の大災厄に遭ひしが、……中略……」毅然としてその操を改めず、桜花の保護に任せし人少からざりき、われはその著しき一例として先ず桜戸玉緒をあげむとす。」と始まり、次のように結ぶ。

玉緒は桜を愛するあまり、これを広く海外に紹介すると共に皇室に於いてこれを愛賞せられむことを希ひ、桜三百種を揮毫して、明治天皇に献じ奉らむことを企てしが、その事を果さずして没せりとい

ふ。玉緒の門人に跡見玉枝あり。よく師の法を以て桜を描くに妙を得たり。かつて桜数百種を画きて宮内大臣土方久元に托して明治天皇に奉獻し以て師の一部を果したりといふ。

玉緒は桜を海外に紹介するとともに皇室に愛賞されることを願ひ、玉枝は師の志を果たしたという。玉枝の桜は玉緒の志に裏打ちされており、師弟に継承された桜には時代を生きた人々のあり方として皇国という側面は否めない。玉枝自身皇室とゆかり深く、四十二年五月富美宮泰宮内親王御用掛、大正十五年四月閑院宮春仁と一条直子の婚儀に調度品<sup>(26)</sup>揮毫、昭和五年皇太后大宮御所へ移転に際し、玉緒の桜の和歌五十首を巻物二巻に収め、その歌にちなんだ桜五十種を書帖二冊に描き御国の花香と題して献上<sup>(26)</sup>、昭和十三年七月参内、昭和十五年五月皇后御前揮毫、十月明治神宮鎮座二十年祭のために駒繫桜の額面奉納<sup>(27)</sup>、などの事跡がある。それは、桜の画家玉枝への評価に加えて、皇后職についた姉小路良子や少女期にふれた良子周辺の公家文化、華族の子女も多く学ぶ学校を開いた花蹊の存在も影響していよう。一方で、玉枝は明治三十七年八月には渡米した人であり、若くしてフェノロサの講演を聴いたことが上京の契機となった。海外に向かう玉枝の姿勢も、『桜史』の「桜を愛するあまり、これを広く海外に紹介する」というくんだりと見合う。師の志を受け継いで桜を究めることによって、絵画が博物学的な様相を深め、三好学との交流も導かれるのであろう。『桜の我が世』の序文は、植物学の分野からの評価に他ならない。『桜の我が世』は「最後に宮崎玉緒先生桜花百首を

書き添へて恩師の霊を慰めます。」と結び、桜戸玉緒詠「桜品詠百首」を掲載する。

桜の画家玉枝は師玉緒との出会いによるが、玉緒と花蹊との間にも交流の形跡が認められる。玉枝の上京後、花蹊は玉緒に書簡を出している。

明治十九年

(九月)二十一日 火曜 晴。寒暖計七十三度。

朝五時夢破。家業如例。西京宮崎玉緒寄書。午下揮毫。

明治九年から十七年までの花蹊の日記は残されておらず、この間の詳細を確認することはできないが、玉枝上京直後の九月に玉緒から花蹊のもとに手紙が届いている。玉枝が師事した縁で花蹊が玉緒と知り合ったとも考えられるが、玉緒と花蹊は早い時期から知り合いであったらしい。上京した花蹊から勝造・玉枝宛の書簡に、玉緒の名がみえる<sup>(28)</sup>。

此度は玉枝女史大奮発<sup>(29)</sup>にて

東行之思立、御最之事<sup>(30)</sup>と存候。

当今ハ別<sup>(31)</sup>而<sup>(32)</sup>文事なくてハ

画事用られず候間、今一層

東行之上、学事書画共

研窮致され候ハ、至極之事と存候。当家

塾生貴女子方<sup>(33)</sup>も、よほと出来候も御坐候て

朝鮮人來朝之砌、門生書画をいたし

大に目驚し候。韓人來朝之

一大美事と人々申候也。おまへさまにも

当月中旬御発車之由、日々

侍入候。種々申上度事候得共、

拜晤之節可陳上也。敬言再拜

尚々、時氣折角御自惜奉祈候。

乍憚、御一統へよろしく

榊玉緒大人へも宣布御風声願入候也。

東京名譽新誌一葉

御覽入候。

九月十日

花蹊

拜

跡見叔父君へ

玉枝女子へ

玉枝の回想には出てこないが明治九年九月に玉枝は「東行」の予定があり、当月中旬に出発する予定である。末尾に「榊玉緒大人へも宣布御風声願入候也」とある「榊玉緒」こそ、宮崎玉緒である。やはり玉枝が世話になる縁でという可能性はあるが、明治九年時点で花蹊と玉緒は交流があり、この文面には玉緒が宮崎家に入る以前の旧姓「榊」が用いられている。宮崎姓になった時期は不明ながら、旧姓を冠して書くほど早

い時期から知っていたということなのではないか。さらに、明治十八年の内容を持つふたつの日記と十九年の日記から、花蹊は玉緒の仕えた小松宮とも交流があったことがうかがえる。

明治十八年

(十月) 廿一日 水曜 天晴朗。

晡、応小松親王召。詣其邸、暫閑談而帰。

(十月) 廿五日 日曜 大霧乍雨。

朝六時眠醒。揮毫。応小松親王命。午下三時、詣邸、観口切茶事儀行其七事。北白川親王、及松平某、伊丹某、某、余培席<sup>(座)</sup>。第一数花、第二清次花月、第三茶カブキ、第四仙遊。畢而会席、其調理美味極妙、善美備貴、其有風皆旨奇雅也。又第五包棗、茶筌飾、第六数茶畢。時、十一時也。乃退席。帰途月明殊佳。作詩、及四時、就眠。

(十月廿五)  
同廿四日

小松親王の命に応じて、午下三時より参る。口切の御茶事にて、北白川宮殿下、松平、伊丹、山田、吉田、宗心、余、培席<sup>(座)</sup>ス。第一数花、第二清次花月、第三茶かぶき、第四仙遊、畢而会席、其調理極めて美味、みな奇雅なるもの也。又、第五包棗、茶筌飾、第六数茶畢にて畢。時、十一時也。

明治十九年

(二月) 三日 亥 日曜 晴、風。

朝六時夢破。午下、同湘雲、詣小松宮邸、又詣三条邸、謁相公、贈祝酒、少而帰。

明治十八年当時花蹊はしばしば小松宮邸に詣で、もとめに応じて揮毫をしたり茶事に呼ばれたり親密な交流をし、十九年正月には年賀にもうかがっている。明治九年から十七年の日記を確認できないが、その間にも何らかの交流があったかもしれない。

玉枝の師事した玉緒、玉緒の仕えた小松宮は、玉枝のみならず花蹊とも交流があった。玉枝の桜の画家としての生涯を決定づける玉緒との師弟関係は、当事者のみならず、花蹊と花蹊の豊かな人脈を背後に持っている。花蹊の許を離れてからも、玉枝は花蹊という従姉の存在に、なお支えられていたことがうかがえるのである。

#### 四、上京へ

『跡見花蹊日記』でふたたび玉枝に言及されるのは、父勝造の死後である。明治十八年の内容を持つふたつの日記から、次の記述を見出せる。

明治十八年

(十月) 十四日

京都跡見玉枝より書至。父勝三、本月十日死去申来る。

(十月) 十四日 水曜 雨。

玉枝書至云、父勝三本月十日死。

十二月一日 火曜 晴。

西京玉枝、寄送叔父遺物。

十月十日父勝造逝去の知らせを花蹊は十四日に受け取り、十二月一日には勝造の遺品が玉枝から送られてくる。翌年、岡倉天心とともに京都に来たフェノロサが日本美術の将来について講演をし、それが契機となって玉枝は上京を志したと『桜の我が世』は伝える。

私は其の演説につくづく感じ、一時抑へて居りました上京の念は再びむら／＼と起つて、早速翌日その旅宿なる丸山の小阿弥に岡倉先生をお尋ねして私の意見の程を述べました処、同先生も大に賛成されまして、東京の狩野芳涯先生や、橋本雅邦先生へ紹介状を書いて下さいました。然し私は母と甥姪の三人を養はねばらぬ身の上ですから、研究の傍その生活費を得ねばらぬので、其の事情もをお話致しますと、夫れなら兎に角八月中に上京せよ、九月には自分は洋行せねばならぬからとの事で、急に女学校の方は辞職を願ひ、八月にまづ一人で上京いたしました。そして従姉の花蹊女史がその頃既に女学校を開いて居りましたので、取りあはずそこへ参りせわにな

りながら、丁度九月に開校される共立女子職業学校へも奉職する事に成り、翌年京都より家族一同を呼び迎へて、茲に東京へ永住する基礎を築きました。

玉枝の上京は、岡倉覚三すなわち天心（一八六二～一九一三）の賛同と配慮によつて実現した。天心がフェノロサ（一八五三～一九〇八）とともに東京美術学校を創設するのは明治二十年（一八八七）、玉枝が講演を聴いたのはその二年前。二十代前半の天心と三十代前半のフェノロサとの出会いが、二十九歳の玉枝を魅了し心に火を灯す。『桜の我が世』によれば、玉枝はこれ以前に上京を二度断念している。明治十年に京都女学校へ奉職する前の回想に、視学官野村素介に東京の工部大学で油絵の修業を勧められ父娘ともその気になったものの長谷川玉峰に反対されて京都にとどまり、十七年には内国勸業博覧会へ出品の折に上京した時に東京で勉強したいと思つたが病死した兄の遺児二人を托されており帰つたいう。父勝造の死によつて母と甥姪を養う玉枝の生活は一層厳しさを増したのであるが、洋行前の若い岡倉天心の好意的な働きかけによつて急に上京する玉枝をまず受け入れたのは、中猿楽町に跡見学校を開いていた花蹊であつた。花蹊の記述では玉枝の上京は明治十九年七月二十六日であり、上京後の玉枝関連の記述からは、しばしば行動をともしている様子がうかがえる。

明治十九年

（七月）廿六日 亥 月曜 晴。

暁四時夢破。拉鶴子、浅子、訪家嚴。帰途、過練兵場、折牽牛花、適見蝶眠。即口占曰、

朝万陀喜露踏分天行久摩々仁

蝴蝶能夢也驚嘉之計無

帰来就業、午下揮毫。玉枝、従西京至。十時就眠。

（七月）廿九日 寅 木曜 陰、又晴。

朝五時夢破、同玉枝、問家嚴、帰来。

八月一日 巳 日曜 晴。

暁四時睡起。修祖母五十年忌辰於浅草法融寺。家嚴、携花海、玉枝而往。

（八月）十五日 未 日曜 晴。

午下、万里小路氏見招。設茶讌、饗午餐。其調理極佳。又点茶、移座楼上。此楼也、風景真快闊、遂入夜、觀月。涼風月明、亦是以銷夏日之炎。時、花州、千久、玉枝等亦来。乃、伴梅洲君婦。亦觀月于三宜楼、閑談移刻、就枕十二時也。

（九月）十九日 日曜 晴、又雨。

午下、同玉枝、到井生村楼、觀覽画会、聽洋人<sup>（フェノロサ）</sup>辺能魯舍氏演説。晡

時帰家。途上、遇雨。

(十月三日) 日曜 晴。

朝五時夢破。同湘雲、玉枝、千久、到浅草法融寺。執行宮原節菴先生、及跡見勝造、遠藤松女一周忌薦事。十二時帰家。泰児至。

(十一月) 五日 金曜 晴。

朝五時夢破。家業如例。家嚴、設茶讌見招。会者、花海、茗橋、千久、玉枝、及余也。又饗晚餐、皆尽飲而帰。

(十二月) 八日 水曜 晴。

玉枝、自茨木<sup>(城)</sup>県帰。

(十二月) 十九日 月曜 晴。

玉枝、移居隣家。

九月には花蹊玉枝ともどもフェノロサの演説を聴き、十月には勝造の一周忌法要が行われている。年末の二十日に「玉枝、移居隣家。」とあるのは、京都から家族を呼び寄せるためであろうか。玉枝は、跡見のほか、生活を支えるために共立女子職業学校でも教える。同校の正式な設置願いが認可され開校されたのは明治十九年九月十六日である。<sup>(20)</sup> ふたたび花蹊の世話になりながら東京での仕事を不得三ヶ月、年末には新しい生活

もだいぶ落ち着き、来たる年の準備をしたのであろう。

玉枝のあゆみには、親族の花蹊という存在が関わっている。花蹊の縁で少女期にふれ得た公家文化、桜の師玉緒との師弟関係を緩やかに力強く支える花蹊の豊かな人脈。父勝造の理解と従姉花蹊という存在に恵まれて、玉枝の生涯の基盤が築かれていく。

さらに上京後の玉枝の事跡をたどり、絵画ならびに和歌の側からの具体的な検討をも加えることを継続課題とし、稿を改めて玉枝の年譜考証を試みる所存である。

#### 注

- (1) 『桜の我が世』(昭和六年 跡見家)。あとがきによれば、昭和五年初夏に玉枝が口述、井上波子が筆記し、翌春上梓されたもの。前半に玉枝の作品ならびに玉枝ゆかりの人々の作品や文章を載せ、後半に回想の口述筆記、末尾に「桜品詠百首」と題して各種桜を詠じた「桜戸玉緒詠」を収める。なお、本書をはじめ文献からの引用は、原則として差し支えないかぎり旧字を新字に改めた。
- (2) 渡辺泉「『桜の我が世』にみる跡見玉枝」『Gyokusai—桜の画家 跡見玉枝展』(跡見学園女子大学花蹊記念資料館 平成十六年) 所収。
- (3) 注(1)に同じ。なお、年齢は当時の慣習に従い教え歳を基本とする。
- (4) 三好学『桜』(昭和十三年 富山房)。同書の長男三好新氏の叙述によれば、三好学は文久元年(一八六一)岐阜県岩村藩士の二男に生まれ、明治二十三年東京大学理学部卒業、同二十四年植物学研究のためドイツに留学、二十八年貴朝、理科大学教授に任ぜられ植物学を担当、理学博士学位取得、大正九年帝国学士院会員、同十一年附属植物園長、十三年名誉教授。著書に「最新植物学」



「実験植物学」等多数。昭和十四年五月出張先の群馬県下にて逝去。勲三等旭日重光章を賜る。「桜の我が世」序文は「昭和五年晩春」とあり、植物学の權威であった同氏の序を巻頭に戴いたものである。

(5) 『明治維新人名辞典』(吉川弘文館 昭和五十六年)には、「六月戊辰の戦功により賞典禄一〇〇石を永世下賜」とある。

(6) 跡見玉枝『さくらの木陰』(跡見精華会 昭和十六年四月)。

(7) 『跡見花蹊日記』(平成十七年 学校法人跡見学園)には次のように記される。なお、日記の本文引用は関連部分を中心とし当該日の記述すべてとは限らない(以下同様)。

慶応二年

(十二月) 廿五日

大工日々セメ候て、漸廿九日節分の日、先々家移りいたし候。此日御発しに相成候。

慶応三年

(四月) 七日

昼後、勝蔵子来、扇面書認くれ様相頼、早速認ル。

(十月) 十三日

八ツ時、専徳寺役増<sup>(僧)</sup>同道にて参詣いたされ候。法事相勤候。勝蔵子も来り候。

(8) 『跡見花蹊日記』には「江州主水」「江州水主子」<sup>(主水)</sup>が来るという記述が、慶応三年(九月)廿五日、(十月)十一日、(十二月)廿二日にある。

(9) 『跡見花蹊日記』明治三年「(七月)六日」には「勝女来。」とあり、花蹊の許を離れていると思われる。

(10) 花蹊が日記をもとに後年自ら記したと思われる二種類の略歴がある(『跡見花蹊略歴』)。そのなかから姉小路家との関わりに関する記述をあげる。

安政三年之比

父は勤王家にて、京師<sup>三</sup>出て姉小路公知卿に召仕へらる。雑掌役を仰付らる。

幕府へ<sup>安久三年十月十二日参照</sup>勅使三条公、副使姉小路公、関東使され候節、目附役として御供

仰付られ、<sup>(大儀名分)</sup>大儀明分を正されたり。舍弟重威も同様御供す。

其以前、<sup>安久三年四月十三日参照</sup>撰河泉台塲堤防之御巡見之御勅使として姉小路公御出発、其切<sup>(愈)</sup>

も父雑掌役として御供す。

安政四年巳年

父重敬、元より勤王之志厚くして姉小路公知卿に仕へる。雑掌役を仰付られる。

(明治三年) 七月十二日

御所より御用召にて姉小路公義参内。此度東京へ召れ候事にて、一同愁歎限りなし。

(明治三年) 七月

御所より御用召にて、東京へ出向候事に相成。

(明治三年) 八月十一日 晴

姉小路殿、東京へ御出発。御供ハ重敬、民部、奥田のみ也。朝七ツ時御出門にて、皆々御別を惜しみ、なげきかなしみ、涙千行万行。それより、残りし人々、御道中御安隠と、<sup>(穩)</sup>今一度御帰京を北野天満宮に祈り、日々御百度をうち居候。東京より花蹊に東行する様にと仰越され、其準備する。

(明治三年) 八月十一日

姉小路西京出発、父様、舍弟民部、奥田、下部、予も御供の筈、準備出来かね、<sup>(後)</sup>跡よりとの事に相成。

(明治三年) 十一月十七日

朝七ツ時出立、沢、浅野と同行にて、<sup>(十一月十九日へ統之)</sup>

(明治三年) 十一月十七日

花蹊京師出発。東行す。十三日間<sup>二</sup>、<sup>(十一月廿九日へ統之)</sup>

- (10) 『明治三年十一月』 廿九日  
品川着。父様ニ逢ひて嬉しなみたにくれたり。  
〔明治三年十一月〕 廿九日  
品川着。父様も迎ひに来られて、築地沢家に着。
- (11) 『跡見花陰略歴』 から、花陰の生い立ちに関する記述をあげる。  
嘉永二年<sup>(四)</sup>  
十二歳の時、石垣東山先生<sup>先生八上町北新町三日の住世の門に入る。</sup>先生も悦んで稽古日毎に扇子を沢山に書をか、せて、大いにはこられたり。また、天王寺横野礎山先生につきて画を学ひ、此当時ハもはや屏風、襖など揮毫ものにて多忙を究む。また母の云、女ハ裁縫が出来なくては不自由なりとて、裁縫の稽古に行く。是も外に修行も有りて裁縫ハ半日つ、稽古に行く。  
安政年間  
十七歳、始て京師に出て、漢学、絵画を学ふ。二年にて帰坂す。  
安政元年<sup>(三)</sup>  
十七歳の時、京都に遊学を思ひたち、宮原節庵謙藏先生に漢学、詩文、書法を学ひ、画を丸山応立、中島来章に学ひて、約二年の後、京都を去つてより、父と共に大坂中之島に居を下し、後藤松陰先生に漢学、詩文を学ひつ、修行中、豪富の子女依頼によりて、自ら家塾を為すに至りぬ。
- (12) 『女流著作解題』(女子学習院 昭和十四年)。なお渡邊重石丸は後年跡見学校の教員となる。
- (13) 『訂正増補 大日本人名辞書』(経済雑誌社出版 大正元年)、『近江人物志』(文泉堂 大正六年、のちに臨川書店 昭和六十一年)の記述もこれによる。
- (14) 『日本歴史地名大系第二五巻 滋賀県の地名』(平凡社 一九九一年)、『角川日本地名大辞典 25 滋賀県』には「村名は地内の玉緒山にちなむ」とある。
- (15) 『近世畸人伝』の「題言」は「此記ははじめ花頭三熊ぬしの勦によりて草す」と始まり、『続近世畸人伝』の序文は「花頭居士 三熊思考」の名で記す。本書の引用は東洋文庫『近世畸人伝・続近世畸人伝』(平凡社 昭和四十七年)。(16) 三好学『桜』(富山房 昭和十三年)。  
(17) 山田孝雄『桜史』(桜書房 昭和十六年)。引用は講談社学術文庫『桜史』(講談社 一九九〇年)による。  
(18) 今橋理子「花惜しむ人——桜狂の譜・三熊派」『江戸絵画と文学』(描写)と〈ことば〉の『江戸文化史』(東京大学出版会 一九九九年)。  
(19) 注(18)ならびに注(14)『日本歴史地名大系第二五巻 滋賀県の地名』。  
(20) 注(18)に同じ。  
(21) パトリシア・フィスター『近世の女性画家たち 美術とジェンダー』(思文閣 一九九四年)は瑟瑟の「桜図」を掲載し「明らかに桜を近くで観察し、でさるかぎり自然主義的に写生している。彼女の桜に対する傾倒と写実的なスタイルは、当時の本草学の潮流の影響を受けている。」とする。  
(22) 注(18)今橋氏は瑟瑟の桜画の「力強さ」は、抽象化された幹が画面の軸となることで、画の中から醸し出されていた」とし、これらの幹は「全て若木なのである。」と述べる。  
(23) 注(14)に同じ。  
(24) 注(17)に同じ。  
(25) 湯本豪一編『図説 明治人物事典』(日外アソシエーツ株式会社 二〇〇〇年)、『日本人名大辞典』(講談社 二〇〇一年)。  
(26) 注(1)『桜の我が世』による。  
(27) 注(6)『さくらの木蔭』による。  
(28) 『跡見花陰日記 別巻』(平成十九年 学校法人跡見学園)所収「書簡I 跡見勝造・玉枝宛/明治九年九月十日/巻紙一紙(藍摺野線入り)/跡見学園女子大学花陰記念資料館蔵」。引用は後半。  
(29) 『共立女子学園百年史』(学校法人 共立女子学園 平成八年)。